

又燒直 鉢冠姫 稗史億 說年代 記

上



式亭 三馬作

本村木町(十)西宮新蔵

又鉢種史億
燒冠姫直
記說年代
(中)

三馬作



本村木町(十)西宮新版

又鉢種史億
燒冠姫直
記說年代
(下)



本村木町

神史家
不事賢記

此億說年代記は草雙紙の初より、當世に至るまで、時の流行に従ひて移り行くさまを略して集めたるなり。然しながら初中晩の分ちは丁數に餘りて委しくせず、近く譬へば北尾先生は清滿清經と時を同じうして、晩年の今に到るが間、寫意月々に變り年々に移る。その餘の畫工は又かくの如し。さるによつて具にせず、猶委しくは來春の増補大全を待つべし。

江戸
茶間屋印

○當世出板の印
▲草雙紙相休の印

此外に洩れたるは、後より是に加ふべし。

式亭三馬編纂

ことしもちよつくら

○雙紙問屋の數を知る歌

△鶴、鳶屋、泉市、村田、山口屋
岩戸、榎本、西は村、宮

○赤本時代の詞辯を早く覺ゆる歌

△大木の生際と來て太印
てんとふといの根ちやふてらこい。
△あらうがや「來て居る」來たわ「てんや
わや」ナント子供衆がてんかく。

岩戸屋 源八	岩戸屋 喜三郎	吉本 吉兵衛	山口屋 忠介	西村 與八	泉市 市兵衛	大和屋出店	奥村 源六	西宮 新六
村田屋 治郎兵衛	鳶屋 重三郎	鶴屋 喜右衛門	伊勢屋 次介	よしや 左兵衛	神明前 大傳馬町	通鹽町	本材木町	
鱗形屋 藤兵衛	山本 丸右衛門	丸屋 小兵衛	甚八	松村 彌兵衛				
通旅籠町	大傳馬町	通油町	通油町	通油町				
岩戸屋 源八	岩戸屋 喜三郎	吉本 吉兵衛	山口屋 忠介	西村 與八	泉市 市兵衛	大和屋出店	奥村 源六	西宮 新六
岩戸屋 源八	岩戸屋 喜三郎	吉本 吉兵衛	山口屋 忠介	西村 與八	泉市 市兵衛	大和屋出店	奥村 源六	西宮 新六

昔々あつた とさの 國へ、 大昔 大なる 桃一つ 流れよる。	懷貪婆、 雀の舌を切つ て放す。 同 猿、龜に 乘りて、 龍宮城へ至る。	諸國百物語 ある。 全 化物屋敷 立、 腥き風吹き 震動する。	有難山の 寒鳥、 全 此頃 餘ッ程新し。
桃太郎、 鬼が島へ 渡り、 猿犬、 雉と共に 寶物を得る。 全	花咲爺、 灰を 降らす。 其後 枯木に花咲く。	道中雙六、 十六武藏 始まる。 全 目附繪を 工夫する。	土佐節、 外記節 を喰る。 全 通り者ある。
かち／＼山の 奥にて、 猿蟹の 合戦あり。 狸、正直爺を たばかる。 全	蜘蛛の巣絞りに 力紙を つけ たる 泥棒、 勾引はやる。 全	茶釜髪、 まき羽織 の人、 作り鬚にて 出づる。 全	通り者の 諺を 通人と そやし奉る。 全
鬼、 土舟を たくみて 敵討ある。 狸、最期。 全	落、口合 といふ もの初め て出来る。 落す。 同 うた	山谷通ひ 吉原馬 はやる。 編笠にて ぞめく。 全	雨落の 細蝶、 珍しく洒落る。 全
鼠の嫁入 あつて 晴天に 雨降る。 化猫、どぶ鼠 謀叛。 全	色子との出入、 劍術の 勝負より お定まりの 敵討起る。 全	野暮と化物を 初めて 箱根 の 先へ送る。 中古	牽強の 後仕舞ひは、 此時よ りぞ 始まりけり といふ。 全
朝比奈、 見越入道を ほろ ぼす。 金平地獄巡り。 全	辨慶島へ渡る。 女島の王、 辨慶と 首引、 小人國へ大き なる鶴降りる。 全	待兼山より 時鳥 出づる。 全	口合を秀句 と改め 秀句を 地口と改まる。 全

本

草雙紙

この頃は

かつてなし。

全

たる本、

松會より出る。

田

繪本はやる。

菱川吉兵衛の
傾城高尾を
初めとし一枚繪
に出る。

全

紅を用ゐず

一枚繪、繪本
彩色摺は
丹か又は蘇芳
にていろどる。

松會開板

これは此頃の板元なり。即ち
奥書をこゝに記す。

家來不審がる

父呆れゐる

その昔、何時の頃にやありけん
都の片邊に平太となんいへる
者ありける。元より家富み
豊に暮すが中にも、常々
一子なき事を憂ひてければ
朝夕に觀世音を念ずる志、
感應ありけん、遂に一人
の眉目よき女子をぞ備
けゝる。かゝれば父母の
喜びいふばかりなく、
尙行末娘のめでたからん
事を祈して年月を経る
程に、娘は早十二とい
ふ年の春をぞ迎へける。
さるが中に母、風邪
の心地と打惱みしが
日々夜々に衰へ、



今いまはのとき際はしとなり
 て娘むすめを近きづけ
 て、いふやう、
 「妾わらわはあの世よの
 道みちへ赴おもむくなり。
 おことが行ゆ末はをも
 見みずして先ま立たつ事
 の悲かなしさよ」と涙なみだ堰せきき
 あへず、傍かたはらなる手箱てはこ
 より重おもげなる包つつみ取出として
 娘むすめの頭かみに戴かぶかせ、上うへには
 肩かたの隠かくるゝばかりなる鉢かみ
 を冠かぶらせ、
 母はは、かくぞ詠よみける、
 さしも草くさ深ふかくも頼たのむ
 観くわん世せ音おと
 誓ちかひのまゝに戴かぶかせぬる。

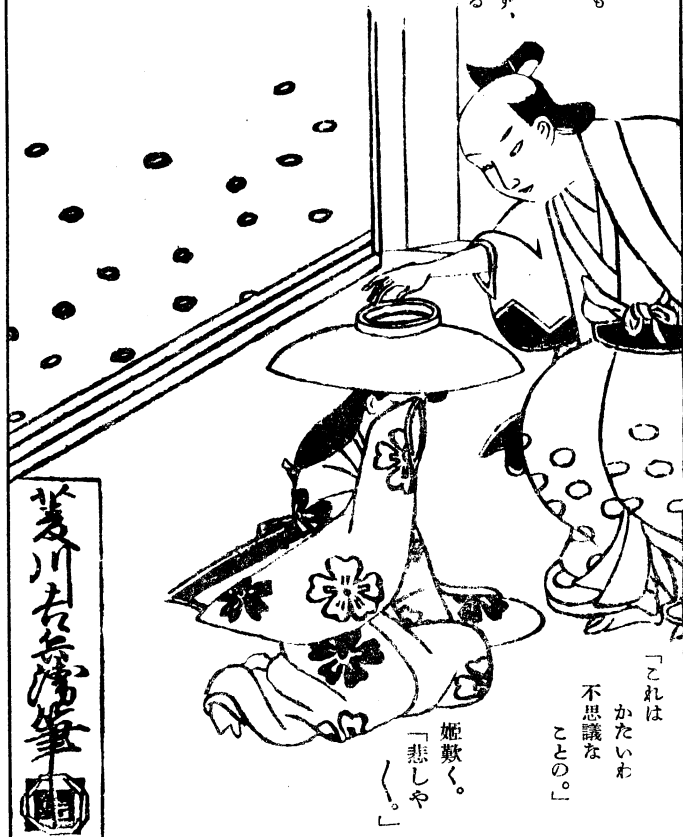


さて一首の歌を詠みて、
 母は空しくなりければ、
 家内の歎きはん方なく、
 娘はわけて別れを悲しみ
 前後を知らず歎きけるが
 やうく心に心を鎮めて、
 悲しくも野邊の煙となし
 にける。
 兵太は形見の品々を
 改めんと、
 娘に着せおいたる鉢を
 とらんとしけれども、
 頭に吸ひつきて更に取れず、



「法力の奇特を
 見せうぞ。
 のうまく
 さまんだ、
 ばさらだ、
 おのれ
 その鉢を
 とらいで、
 おかうか。」

父大きに驚き
 近しき人を集めて。
 さま／＼手を盡せども
 はなれざれば、
 娘の歎きいや増り、
 母に別るゝのみならず、
 今かく片輪となりたる
 果敢なさよ、
 と口説きたてゝぞ
 泣きければ、
 聞くにつけ、
 見るにつけ
 歎かぬ者は
 なかりける。



「これは
 かたいわ
 不思議な
 ことの。」

姫歎く。
 「悲しや
 」。

菱川右衛門筆

赤本初めて出来る。

赤本

表紙一面の
表題に繪を
書かず紙を黄色
に染める。

赤紙の外題に、白紙の

全

表題をはる。
この時、表題に
繪を書入るゝ事
はじまる。

鳥居庄兵衛といふ者
大きに
はやる。

曲

つゞいて
清倍行はる。

黒表紙に青赤の外題
をはりて

黒本

黒本と稱す。
外題表題の
紙を俗に色紙短冊
といひはじむ。

地本屋の筆者丈阿と
いふ人、赤本を作り、

作者

作者の名を出
さず、ナント
子供衆、合點かゝの
書入此人より起る。

繪師鳥居清信筆

かくて年月を
過すにつき
親しき人々寄集り、
何時まで男の獨り住
にても濟むまじとて、
勤めに任せ後の妻をぞ
迎へける。

それには變りて、

姫は生れもつ
かぬ片輪を恨

み、明暮歎き悲しみけるが
繼母はつくぐと

姫が片輪なるを

疎み憎みて、夫の手前



ばかり
親切に見せかけ、
留守になればいろゝの

「うとましいあまではある、
殺潰しとはおのれが事ぢや。
この棒で打据ゑてこますぞ、
けちいまゝしい。」

近所の人、とり支ゆる。

「いやもう興がる事ぢや。

それでは堪忍がなり申すまい。

先づ平にゝ。」

姫は餘りの

悲しさに

亡き母の墓詣りして

わが身の不運を託ち、

もはやこの世に

甲斐なき命なれば

とくく迎へとりてたべ

と、打臥してぞ

歎きける。

咎を拵へ折檻するぞ

あらましき。

「南無傾生菩提
南無阿彌」。

「のう、かゝさま

許して下さい。」

大板部鳥居清信

父も妻(の)言
葉を誠として、
姫を憎みけれ
ばあるにもあ
られず、宿を
立退きしが、
道にて盜賊に
出會ひ難儀す
る。

「やつ
ちや
して
大分
甘い
もさ
ちや。」



「のう、恐や、
怖ろしや。
命ばかりは
助けてたべ。」

鳥居清満画

「てんと風富之介が
舞臺顔と
來てゐる。
これ
姐さん
待た
しや
れや
おちが
悪くは
ぞいませ

白紙又は赤紙の

青本

畫外題に、
黄表紙をか
けたる本を
はじめて製す。是を
青本といふ。

繪師の名を雙紙の終り

金

へばかり出さず
して、上中下の
分ちなく、
ゆきなりに名を誌す。

鳥居清秀、清重、

金

富川吟雪
富川房信
田中益信
江戸繪と號して諸國
にはやる。

奥村重長、石川

金

豊信の繪はやる。
田中益信は、
草雙紙の
畫作を著す。

文字、通幸、和祥、

作者

丈阿、専ら
雙紙を作る。
終に作者の名を出す
事は此和祥より始まる。

鉢冠姫の盜賊に

勾引されて
色里へ賣らるゝ。

「これは、

わしが妹に

違ひござらぬ。

早く五十兩貸して

下され。ちと様子が

ある故、笠を着て居まする。

はてさて何處からも

てんやわんやな事は

いはせませうまい。」



鉢冠姫、この場の様子を

不審がる。

「あいゝ

十六でござんす。」

鳥居清重筆

遺手婆、話する。
「あれは背笠では
ござらぬ。
皿鉢の類ぢや
さうな。」

亭主
いぶかる。
「好い器量の娘ぢや、
合點の行かぬ。五十兩なりや
こちの抱へにしても大事
ない。笠をとりやいの。
親のため勤めするか、
かわいやく。」



「そなた、いくつに
なりやるぞ。
ても良い子の。」

「不思議な
ことの。」

早う
ほい出す
がよう
ござん
す。」

江戸富川吟

鉢かつぎは片輪なること現はれて
大機にも住家ならず追出されければ、
當所もなしに迷ひ出るに、百姓ども、
姫が姿を見て、化物なりとて驚く。



鱗形屋山本の本、
おびたしく賣れる。

主目本

一代記敵討、
武者繪本等
にたまさかに序文有。

全

赤本、青本、
黒本、
三色の雙紙、
ならび行はるゝ。

五二

富川が繪の風は、
鳥居に
似て
少しかはる。

六

豆繪といふもの、
富川、
鳥居より
始まる。

作者

玉屋新兵衛、
桶伏の
本
草雙紙の大當り。

赤本は此節絶ゆる。

青本

青本を
新板

として
黒本は古板と稱す。

青本に彩色摺の

全

外題を
はりて
鱗形屋
より始めて新板。

鳥居清満、同清經、
同清長、北尾

画工

重政、いづ
れも同じ繪
風にて、少
しづゝの
變りあり。

鳥居家の風、清經
よりはじめて、

全

少し當世に
移る。
此頃の書入れ文句に
野暮なる洒落混る。

喜三、通笑つくる。

作者

戀川春町
一流の畫を
書出して、
是より當世にうつる。

姫は當所なしにさまよひ

けるが、とある渡し場

に至りて、何卒その

舟へ乗せて下され、

と頼みければ、

船頭、乗合の

人々、怪しき

姿を見て、舟へ乗せること

叶はずとて、櫓を押切つて漕出す。

かゝるところへ以前の百姓ども

大勢、化物を打殺せとひしめいて、

か弱き姫を取巻きて、

既に危く見えたる所へ



「おれと一緒に歩きな

せえ。何ぞ面白い事
があるだらう。」

「だんく
の御禮は
言葉につ
きま
せぬ。
嬉しや
く。」

江戸者と見えたる二三人

つれの男來かゝりて、

この態を見るより、

不慙にや思ひけん、

大勢の百姓を

なだめて

歸し、

先づこなたへ

來るべしとて

姫を伴ひ、江戸の

方へぞ、いでにけり。

おれは北尾重政

「何でも

あやしみに

牡丹だ。」

王子路考にそのまゝの風俗だ。

田舎娘の所作ごとが

見たい。」

おれは長吉

「なんと吉公、

すとなだおむく

ではないか。」

此時代の通言也

記代年説偉史稗

づゝのよへき國。北尾政演画

さて彼の男と連立つて江戸へ來りしに、深切とは思ひのほか、田舎歩きの大の山師なれば、内へ歸るや否や大勢の友達と相談の上、何でもよき金儲なりとて、姫にいろ／＼の藝を教へて兩國へ見世物に出す。

「さてお目通りに控へましたるは、新下りの太夫、御評判の鉢娘にござります。いよ／＼これより藝當にさしかゝらせます。

テンカラ

ハリトウ／＼

さて／＼この次のかぶり業。



挿鉢かぶるが

夜討の段、

ソレ毛氈

かぶるが

放蕩息子。

こりや

それ

ちかばかりか

なんちかや、

イヤ〜どつと褒めたり。」

「ヤンヤ〜」

いづれも様の

お聲が便り

ちや〜。

お聲の便りは

御尤もはどうだ。」

使むき

北尾三治郎直

「札買つて〜
評判々々。」

表の〜ハ



草雙紙いよ〜

洒落る事を
専一とする。
當世風鉢

此時より始まる。

袋入

茶表紙に細き
外題。
紙袋人にして

青坂とは別板なり。

作者

芝全安出る。
喜三三は洒落たる事
通笑は人の
常にあること、
なす事の穴探し妙也。

面工

柳文調 役者似顔の
元祖、
勝川春章
續いて

似顔繪を書く。

全

鈴木春信、湖龍齋、
女繪の一枚繪
一流なり。
柱隠し女繪本はやる。

鉢冠姫を見世物に出した所が、
一向評判もなくまづざつと
二百兩ばかりの損を

しければ、これではいかぬと、
此度は幸ひ三味線なども致へたる
こと故、藝者にして押出した
ところが、今度はとんだ

大評判にて、鉢かつぎだか
ら轉ばしたら

割りやうもあ

らうかと、た

めになるお客

大勢出来て、

見世物の損は

さつそく儲け

出しけり。

江戸物
焼け

神清長

萬印

の川喜平

「早く歩あしび給へ。是から
すつとそれすい行
きの、ぐい上りの
すい酒落おちの、ぐい
歸りといふ所は
どうだ。」

「此頃は皆、
無ぶつば
らつたか
ら青樓も
面白か
らずさ。」

「すこと
ね。」

て貰ひ
やせ

鉢具と頭たに焼
し接にはられがの

或時心安くする客大勢にて

相談をつけゝるは、
何卒して頭の鉢を

とつてやりたいもの

とて、色々すれども

はなれぬ故、この頃

はやりの瀬戸物焼接

に頼んだら、

ひよつとして

取りやうも

あらうかと

大勢にて

友達の焼接

へ連れ來り

頼みかける。

草雙紙は

主月本

大人の
見るもの
と極まる。

北尾勝川の浮世繪

画工

はやる。
春章を
俗につぼといふ。

歌川豊春、浮世繪に名

全

あり。
鳥居清長、當世
風の女繪一流を
書出す。世に
清長風といふ。

一流ある畫工、

全

あのかき方、
當世風にかはる。

芝全交が社中萬象亭、

作者

戀川春町畫作。
萬象亭、全交、
可笑味をおもにとる。



焼接の
かみ様
さぞ焼餅が
上手だらう。

歌川豊春町画

「瀬戸物焼接な
ら出来るが、
鉢をとつて頭
の焼接は、と
ても出来
ねえ。」



青本、大當りを袋入

に直す。

青本

表紙の白半

丁に口のり

をつけぬ事起る。

春好續いて似顔繪

を書出す。

面工

俗にこれを

小つぽと稱す。

但し役者、角力也。

蘭德齋、春道一度

繪の姿かはる。

全

春朗同斷。此頃

の變紙は重政、清長、

政美、政信、春町なり。

政美、政信、繪の姿

一變する。

全

勝春、英、

役者、角力の似顔

繪をかく。

通笑、全交、喜三、

三和、春町、

作者

萬象、杜芳、

いづれも大當りある。

鉢かつぎの稽(古)所大きに評判よく、何處の浦
でも女の子の稽古屋は淨瑠璃附りにて大
概は張連中の多きものなるが、此娘
にも手足をつけたがる者大勢あり
て、日毎に入込むのらつき連中、て
んでに入れ札の心持にて居る中にも
有徳なる町人の息子株、獨り住の徒然に慰み
ながらの稽古に來りしが、鉢かつぎが心ばえ
優しきに心を寄すれば、姫も流石に萬更で
もなく、誘ふ水あらばの折節な
れば、錦木の面倒もなく

洒落
かけける。



草雙紙

善本

だんくんと
理窟に
おちる。

女繪の姿は、

画工

清長に
始まつて
春潮に至り、
當世に變化する。

彩色繪の遍數、
中古に
倍す。

全

江戸繪、
ますく尊し。

柱かくしの女繪は
湖龍齋より
はやり出し

全

清長に至つて
ますく世に用ゆ。

森羅亭萬寶、
雙紙を作る。

作者

烏亭巧馬
久しく廢れ
たる落断を再興す。
談洲樓と號す。

彼の息子株と姫が戀中、
今は互に慕ひ合ひて、
二世も三世も變らぬ女夫
などゝとんだむづかし
き譯となりしが、所詮
親方の手前といひ、
又兩親の心底を恥ぢて
二人連立ち行方知れず
なりければ、
一家親類從兄弟
再從兄弟、伯父伯母、店請、親分、
子分、大屋様までの大騒ぎとなり、
やうく尋ね
出して親里へ連
歸り二人の胸
を尋ぬるに、



この

意見も

絲瓜も

聞入れねば、

兩親を始め親類も呆返り

あのやう

な片輪者

を嫁にと

つては、
おにやめ

嫂
姊婿

大勢に

對しても

外聞なとをき惡わるし

何卒して

片輒老

を思ひきらせんとて

大勢勢りつ賺しつ

教訓する

ハテお前が料簡、かつぱ

何だろ

より

分ら

ねえ

コ
ウ

地口

おなをい

おれが

やうに

いふ
だ。

44

11

画

休

1

5

「

609

青本の趣向

甚だ高慢に

青本

袋入の
あとを
青本に
すること
はやる。

大勢の意見も

馬の耳に風なれば
両親も今はせん方
なく、もて倦み
てゐる所に

智慧自慢の

男罷り出ていふやう、
是はよき謀

あり、まづ
嫂大勢を美し
く粧りて並べ

おき、其中へ
鉢かつぎを

呼出し、嫁の器量
競べをし給ふべし。

この事の定日定ま
らば、鉢かつぎも、

繪のかき方、

またく
當世に移る。

由工

北尾、勝川、
歌川、おのく
その名高し。

歌麿當時の女繪

を新たに
工夫する。

全

北齋獨流の一派を
たつる。

豊國、役者似顔繪に

名譽。

全

歌麿の錦繪、
北齋の摺物
世に行はる。

いづれも

作者

めでたし
千秋萬々歳。



「ほんに私が苦勞をしたも
丁度はちかけ三年に
なりやす。」

恥を思ひて
 己より身を引く事
 疑なし、といひけ
 れば、皆々尤もと同じ
 けり。又鉢かつぎ
 は器量競べの噂を聞くより、
 我身片輪のことなれば、
 嫁競べの座敷へ出ては、
 いとしき人に恥を
 與ふるにひとしければ、
 何處へなりと身を忍ばん
 と息子にも忍びやかに
 語り聞かせ互に名残の
 涙堰きあへず、其夜も
 明けゝれば泣くゝ立
 出でんとする折柄、
 不思議や戴きたる鉢
 がばと落ちて中より
 數の寶物自然と湧出
 でければ、二人は喜び限りなく、
 嫁競べの定日をぞ待ち居たる。



春明の曉月空運
 又岐
 上高屋取玉
 くれゝ五月事休

鉢が缺けた
 寶が
 出た。
 飴が嫌
 なら
 風た
 しろ
 ころ。
 何を
 いは
 しやる。

當時部

豊廣

かくとも知らず
嫁競べの定日となりけ

れば、嫁大勢こゝを晴ぞ
と着飾りて、白粉べつたり

油こてく

なすりつけて

打掛捌きに蹴蹴くやら大騒

ぎにて、今や出ると斜に構へける。

もし鉢かつぎ出たら

ば、一度にとつと笑はん、

とさどめきたつて

居る所

へ一間

の内より

鉢冠姫しとやか

に立出る。

その有様、姫

たる容貌、桃李芙蓉

の花の顔、實にも氣高き

粧ひにて

年は二八を過すとも、

十代次日名
長喜

豊廣



婿、心の内
成程、おらが
婿、おれは

婿大勢
鼻をひと
く、何れも
婿ア自慢
これ見て
並居る。

婿、美しい
婿、わえ
婿、入
婿、同断

まだ二九からぬ
愛嬌に
色ある小袖を
襲ね着てしづく
座敷に直りければ、
並居る姉婿
嫂も、おのが
手盛の毒食は
皿にはあらぬ
鉢かつぎに、
一ばい参つた
大勢が
呆れて言葉も
なかりけり。



「何とどうだ。
又美しいの
段が違ふだ
らう」と、
これも心の内
で思つて
居る。

しても鉢かつぎが眉目よき
 姿を見て、両親はじめ
 大きに喜び
 早速
 婚禮も首尾よく調ひ
 夫婦睦じく榮えけり。
 爰にまた鉢かつぎが
 實の両親は、
 かの繼母の
 邪より
 娘を追出し
 たる報にて
 忽ち巡りて二人とも
 乞食と成下り やうく
 その日を送りけるが、
 或時姫夫婦大勢の供を
 連れて、かの過ぎ去
 りし母が信心したる
 觀世音へ詣でけるが、
 かの門前にて不思議にも
 巡り合ひける、



姫は一目見るより、わが
 父上とは思へども、
 數多の家來を憚りて、
 せき來る涙をおししづめ、
 一先づ我家へ歸りける。
 兎角して夫にもかくと告げ
 知らせければ、其後乞食を
 取上げて一生安樂に過しける。
 是をや仇を以て
 恩に報ずるとや
 いひつべし。
 偏に大慈大悲の妙智力、
 行末目出度く
 榮えけり。

右全部十五卷
 式亭三馬戲模寫



中
 古
 のち北尾紅翠齊畫

此畫は鉾かつ
 ぎの本文をかつ
 りて、古代よ
 り十年前の文
 法に従ふ。之
 に依て當時の
 青本と口調大
 いに違あり。
 すべてこの十五
 丁の圖は一流の形
 を眞似て青本通
 のお慰みに備ふる
 なり。必ず筆意を
 をかねたと思ひ
 給ふな。各々流儀の
 癖と穴とを穿ちたるに
 非ず、たゞ繪の形を
 似せたるのみにして、
 近くたとへば役者の
 聲色をつかふが如し。

觀水堂丈阿	▲中古まで自筆 自作の人	戀川春町	田中益信	▲中古まで自畫作 をする人名	問屋 追加	休の 追加	當時 茅町	南陀伽紫蘭	竹塚翁東子	壁前亭九年坊	千差萬別	畑 芋輔	萬象 門人若松萬載門	龜山人龜遊女	戀川好町	作者名寄拾遺
-------	-----------------	------	------	-------------------	----------	----------	----------	-------	-------	--------	------	---------	---------------	--------	------	--------

芝全交	萬象亭	喜三二	▲名人戯作者六家撰			歌川豊春	春林	湖龍齋	奧村鈴木春信	▲昔より青本の畫をかゝさる人の名	北尾政演	喜多川歌麻呂	鳥居清長	畫工名盡	
唐來三和	戀川春町	戀川春町	此外にも洩れたる畫者 多かるべし。追て加之。			多かるべし。追て加之。	春山春鶴	勝川春章	石川豊信	きるなの根から かねのなるき	蕙齋政美	北齋辰政	勝川九德齋春英	これは來草雙紙 板下を休の部	

萬象通笑の部は大全にゆづる。														
其外大當り擧げて數へ難し。別して														
萬象通笑の部は大全にゆづる。 唐來三和 萬象亭 喜三二 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町														
萬象通笑の部は大全にゆづる。 唐來三和 萬象亭 喜三二 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町 戀川春町														

三馬自畫作



名作青本略記